

未来への伝承

もうひとつの土浦八景

沼尻墨僊と色川三中

博物館では、この春、特別展「土浦八景―よみが

える情景へのまなざし」を開催しました。八景とは、美しい風景を八つ選び、中国の瀟湘八景にならって「帰帆」「秋月」などの語を組み合わせたものです。

土浦では、宝暦2(1752)年に土浦藩主土屋篤直が選定した「垂松亭八景」と、江戸時代後期に町人たちが選んだ「土浦八景」という二つの八景があったことが大きな特徴です。このコーナーでも、平成29年の4月号で「土屋篤直と垂松亭八景」と題し、紹介しました。今回は、江戸時代後期の土浦八景に関わる、新たな資料をご紹介します。

江戸時代後期に選定された土浦八景とは、次の八つを指します。

銭亀夕照 下田落雁 神龍寺晚鐘 桜橋晴嵐

川口帰帆 鷲宮夜雨 霞浦秋月 北門暮雪

南は「銭亀」、すなわち桜川にかかる水戸街道の銭亀橋から、北は土浦城の「北門」まで、八景はおよそ城下から選ばれています。

この八景の選定に関わり、漢詩や和歌、俳句を詠んだのは、沼尻墨僊・内田野帆・川田幸枝・色川三中・如蓮の五人です。如蓮が神龍寺の住職、その他の四人は城下町に暮らす町人でした。年長者は安永4(1775)年生まれの内沼尻墨僊、最も若いのは享和元(1801)年生まれの色川三中です。墨僊が安政3(1856)年、三中はその前の年に亡くなっています。同じ一九世紀前半の土浦の町で暮らした五人は親交をもち、その交流のなから土浦八景が生

まれました。

しかし、五人が同じ八景で詩歌を詠むということは、考えてみれば少し不思議な気がします。五人にはそれぞれお気に入りの八景があったのではないかとそんな想像をしてみました。

事実、沼尻墨僊は次のような独自の八景を選び、漢詩と和歌を残しています。

銭亀橋夕照 上沼落雁 照井山晚鐘 北門晴嵐

河口帰帆 下田夜雨 東崎秋月 宝珠山暮雪

特別展の準備中は、墨僊一人がこのような八景を選んでいたらと考えていましたが、色川三中もまた独自の八景を選んでいたことが特別展の会期半ばで新たにわかりました。

色川三中は薬種業と醤油醸造業を営むかたわら、国学研究を精力的に進めた学者です。たくさんの蔵書をもつ三中が弟の美年に書かせた蔵書目録「瑞霞園書籍目」の裏表紙には、三中により次の八景が朱書きされています。

銭亀夕照 上沼落雁 善心寺晚鐘 小松晴嵐

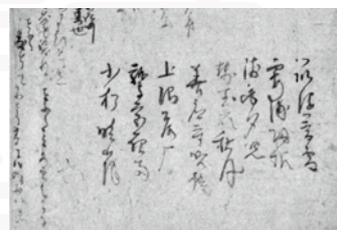
霞浦帰帆 鷲宮夜雨 勢至岡秋月 筑波暮雪



▲色川三中肖像

「上沼」は現在の文京町から生田町付近にかつてあった沼、「勢至岡」は霞ヶ浦をのぞむ小松の高台を指します。

最初の三つ(「銭亀夕照」から「善心寺晚鐘」まで)は墨僊の八景と同じですが(照井山は善心寺の山号)、以下は選んでいる場所が異なります。



▲「瑞霞園書籍目」の朱書き

沼尻墨僊に加えて、色川三中まで独自に八景を選んでいたらということは、各人が自分なりの土浦の八景の選定を試みていたことをうかがわせます。こうした八景を選定しながら、一方で共通の八景である「土浦八景」にも和歌や漢詩を残したことになります。一口に土浦の八景といっても、藩主が選んだ垂松亭八景から、江戸時代後期の土浦八景、また墨僊や三中が独自に選んだ八景まで様々な種類があることがわかってきました。八景に選ばれた場所も色々ですが、唯一どの八景でも共通する場所があります。それは「銭亀(橋)夕照」です。夕日に照らされた情景が美しい場所として、お殿様から町人まで江戸時代の土浦に暮らした誰もが認める所だったのでしよう。桜川の川面に吹く風を感じながら、夕景の銭亀橋付近を歩くのも歴史の楽しみ方の一つです。

※「瑞霞園書籍目」は、七月二日まで展示しています。

関博物館(☎824・2928)